

イエスは弟子たちが守るべき「新しい掟」を与えます。この「掟」は私たちが生きていく上での指針となるものといったらよいのかも知れません。その掟の内容は、互いに愛しなさいということです。これだけであれば、既にユダヤ教の中心的な戒めとして重視されていました。ラビたちは、数多くある戒めを要約する際、「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くしてあなたの神、主を愛しなさい」(申6:4~5)という戒めと、「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」(レビ 19:18)という戒めを用いていました。ユダヤの人々がお互いに愛し合うことはユダヤ教の要約であったのです。それでは、どこに「新しさ」があるのでしょうか。

「新しさ」の一つは「愛する」だけでなく、「互いに愛し合う」ということです。「互いに愛し合う」というと教会の中で、キリスト者同士が大切にしようことだと受け取られてしまうかもしれません。しかし、イエスの教えは本来キリスト者の内と外を区別するようなものではなかったはずです。また、「互いに愛し合う」とは「自分がこれだけ愛した」という自己満足的な愛から私たちをもっと豊かな人との関わりに招いていると考えることもできるのではないのでしょうか。

もう一つの「新しさ」は「私があなたがたを愛したように」という点です。「イエスが愛したように、それを模範として私たちも愛さなければならない」というものではありません。「イエスが私たちを愛してくださった、だからその愛を受けた私たちは愛し合う」ということだと思ふのです。イエスは自分の命を与えるまでに弟子たちを愛しました。それは、「世を愛して、そのひとり子を与えてくださった」神さまの愛の具体的な現れです。そのような質の愛をもって、互いに愛し合うところに「新しさ」があるのではないのでしょうか。私たちが互いに愛し合う時、私たちがイエスの「弟子であることを、皆が知るようになる」ということも大切です。「皆」とは、まだキリスト者とされていない人々のことです。そのような人々が、キリスト者がいることを知るのは、私たちの間でイエスの愛が生きていることによってなのです。もし、この愛が生きていないのであれば、その群れがたとえ教会に集まっても、イエスの言われる教えが拡がることはないでしょう。「新しい掟」によって互いに愛し合う時、復活されて私たちと共にいる、イエスの愛が、私たちを通して人々に示されていくのです。